

1. オープニングセレクション

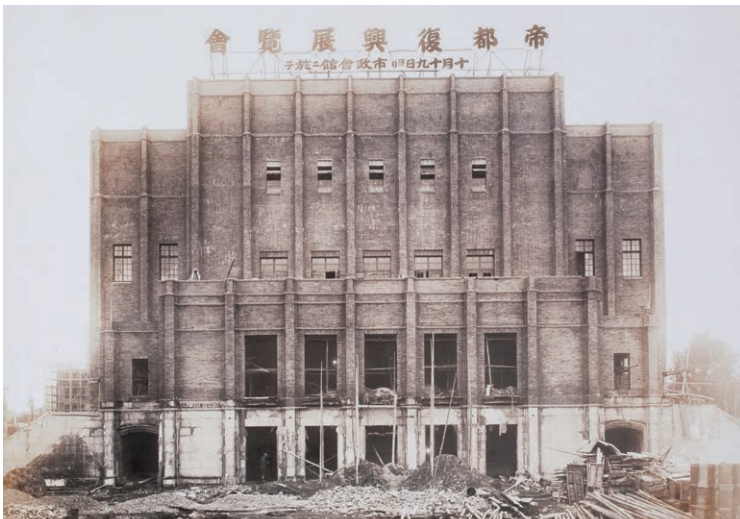
<日比谷公会堂の誕生と設計>

日本初の本格的な公会堂建設の礎

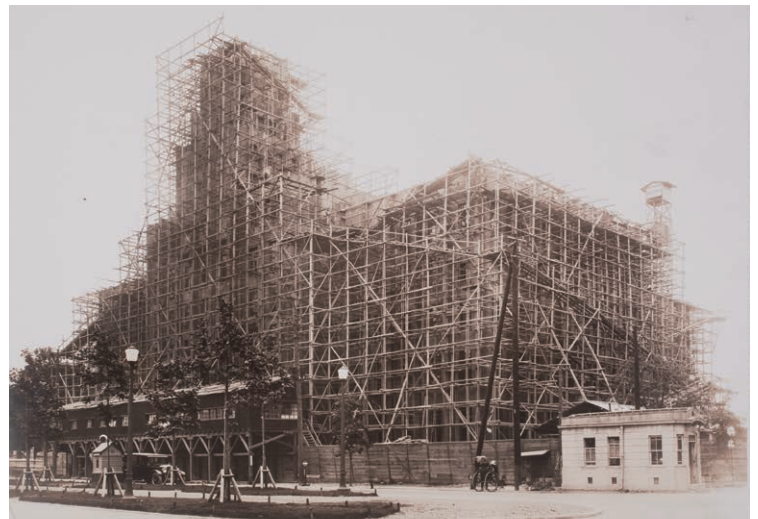
1920年(大正9年)、東京市長になった後藤新平氏は、市政のために様々なプランを掲げ、その中に「衆知を網羅する市政調査機関の設立」及び公会堂の建設がありました。その趣旨に賛同した安田善次郎氏の寄付により、1922年(大正11年)に「財団法人東京市政調査会」が設立され、公会堂付設の市政会館建設に着手します。

建設にあたって、8名の建築家の懸賞競技の結果、1923年(大正12年)、早稲田大学教授工学博士の佐藤功一氏の案を基礎として設計することになりました。

日比谷公会堂は1929年(昭和4年)10月に落成しました。座席数は、2,740席で国内第1級の集会場でした。落成後、公会堂の運営を東京市政調査会から東京市が引き継ぎ、公営施設として東京初の大市民ホールが誕生しました。



日比谷公会堂完成直後



日比谷公会堂建設時(市政会館側より)



後藤 新平氏



安田 善次郎氏



佐藤 功一氏

2. 近代文化の発信地として 〈戦前、戦中の日比谷公会堂〉

時局に影響を色濃く映し出す催し

1929年（昭和4年）10月に会堂開き（こけらおとし）として「児童の会」と「音楽会」が催されました。

オープン以来、日比谷公会堂では、音楽、演劇等だけでなく、講演会、各種式典・コンクール、政治演説会など多彩な分野の催しが行われ、近代文化の発信地としての役割を果たしていました。

戦前、戦中には特に盛況だったのが政府首脳や一部の思想家による時局講演会でした。国民の緊張が高まりつつある中で、会場に入りきれない人々が会場の周囲を取り巻き、壇上の講演者に拍手を送っていました。

1941年（昭和16年）、太平洋戦争開戦により、戦時統制が強化されると言論や文化活動の自由が制限されるようになり、音楽公演、演劇なども軍国主義的な内容となり、軍や政府による戦意高揚のためのイベントが多くなりました。

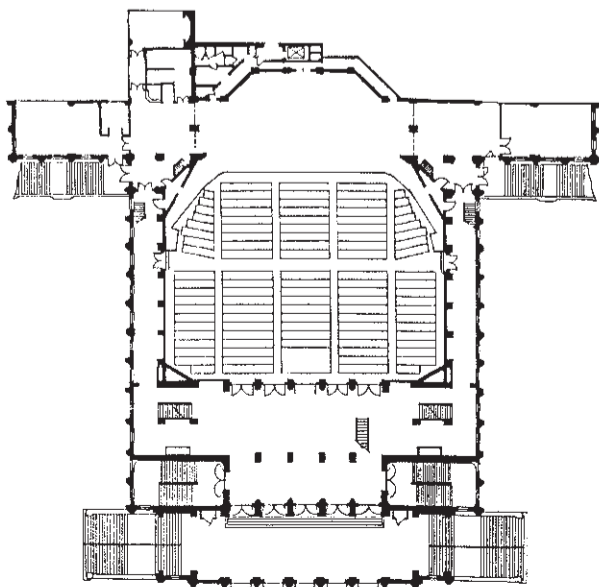
戦時下の物資不足により、日比谷公会堂でも戦争資源確保のため金属回収が行われ、椅子席、電灯器具、装飾器具等、木材で代用できるもの以外全て回収されました。



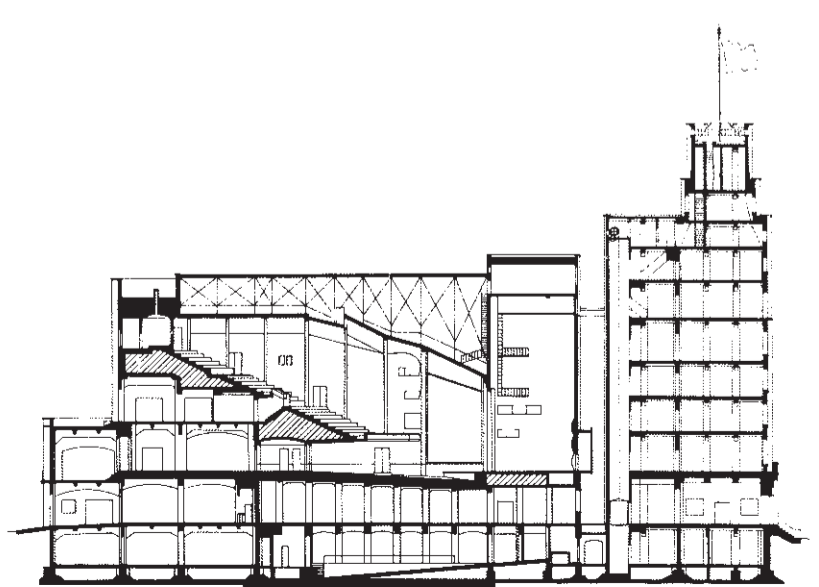
大政翼賛会主催の「時局突破大講演会」で演説する東条英機首相（1941年）写真提供：毎日新聞社



「米英撃滅大講演会」の陸海軍合同演奏（1942年）写真提供：毎日新聞社



2階平面図



断面図

3. 戦後日本文化への新しい役割 ＜戦後の日比谷公会堂＞

市民の文化意識が急速に発展

1945年（昭和20年）、終戦を迎えると日比谷公会堂は、1949年（昭和24年）まで進駐軍に接収され、軍関係者の娯楽の場「HIBIYA PUBLIC HALL」として利用され、日本人が利用できるのは昼のみでした。

GHQの接収解除後、一般市民の間で娯楽や音楽を求める人が急増したため、荒廃が進んでいた部分等の改修工事を行いました。

その後も1946年（昭和21年）に「VICTOR秋の藝術祭」、1948年（昭和23年）に「東京フィルハーモニー交響楽団第1回定期演奏会」、1950年（昭和25年）藤原義江（ふじわら よしえ）率いる藤原歌劇団による「ビアンカ/カヴァレリア・ルスティカーナ」、1954年（昭和29年）ヘルベルト・フォン・カラヤンの指揮による演奏会等、多彩な音楽イベントが開催されています。

昭和30年代になると、音楽だけでなく一般芸能文化が急速に発展し、多数の民間施設が建設され、日比谷公会堂でも大改修計画を策定し、様々な改修・改築を行いました。

また、音楽・芸能観賞団体が相次いで誕生して、使用希望者が非常に多くなり、日比谷公会堂は戦後日本の文化的活動の重要な拠点として多くの市民に親しまれました。



進駐軍に接収された日比谷公会堂（1945年）
写真提供：毎日新聞社



藤原 義江氏
写真提供：藤原歌劇団



VICTOR秋の藝術祭（1946年）



東京フィルハーモニー交響楽団（1950年）
写真提供：毎日新聞社

4. 新たな社会の中で 音楽や政治集会の場としての役割

1970年代の日比谷公会堂では、フォークソングとジャズの重要なアーティストが集まり、音楽的にも社会的にも大きな影響を与えるコンサートが開催されました。フォークソングでは社会運動と結びついた歌詞が、ジャズでは新しい音楽の形態が探求されました。

1979年(昭和54年)には、日比谷公会堂開設50周年記念演奏会が開催されました。

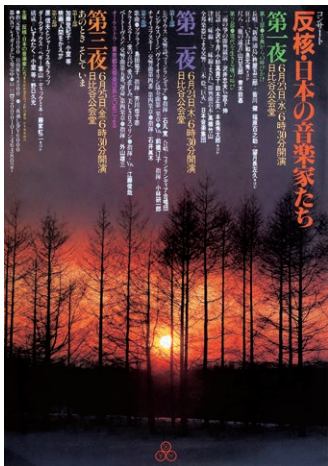
1980年代には、音楽や文化活動だけでなく、反核運動も盛り上がり、1982年(昭和57年)には、「反核・日本の音楽家たち」コンサートが開催されました。1985年(昭和60年)には、日航ジャンボ機墜落事故があり、「日航ジャンボ機墜落事故・東京地区追悼慰霊祭」が行われています。

1989年(昭和64年)に都民コンサート40周年記念式典も開催されています。

1999年(平成11年)6月、建築後50年を経過している建物で、都民となじみが深く、地域のランドマークとしての役割を果たしている等の条件を満たし、日比谷公会堂は「東京都選定歴史的建築物」に選定され、開設70周年を迎えました。



アートブレイキー&ジャズ
メッセンジャーズ(1971年)



反核日本の音楽家たち
(1982年)



美空ひばり生誕祭
(1993年)

代表的なコンサート・イベント

- ・ 1970年 楽聖誕200年記念 ベートーベン・チクルス第一回「運命/田園」(クラシック/映画)
- ・ 1972年 ジルベル・ベコーリサイタル(シャンソン)
- ・ 1978年 ウィーン少年合唱団(合唱)
- ・ 1989年 湯川れい子の第3回消しゴムコンサート(ロック)
- ・ 1991年 ボリショイ舞台サーカス(サーカス)



楽聖誕200年記念ベートーベン・
チクルス第一回(1970年)



ジルベル・ベコーリサイタル
(1972年)



ウィーン少年合唱団
(1978年)



湯川れい子の第3回消しゴムコンサート
(1989年)



ボリショイ舞台サーカス
(1991年)

5. グローバル化とデジタル時代における日比谷公会堂の現代的役割

21世紀に入り、グローバル化とデジタル技術の進化によって、音楽・文化・政治の表現の場は大きく変化しました。日比谷公会堂も、伝統的な役割を維持しつつ、新たな時代に適応した役割を果たしています。

クラシックやジャズのコンサートが中心でしたが、2000年以降はポップスなどの多様なジャンルのライブが開催されるようになりました。

また、2000年以降、政治集会だけでなく、市民フォーラム、国際シンポジウム等に関するイベントが数多く開催され、政治・社会活動の場としての役割も変化してきています。



浜口庫之助メモリアルコンサート100% ALOHA STYLE (2000年)



100% ALOHA STYLE by KONISHIKI (2004年)



日比谷公会堂と野外音楽堂の未来を語る会 (2007年)



第81回記念 都山流尺八演奏会 (2013年)



国際交流のつどい (2015年)

6. 文化財としての日比谷公会堂

- ・戦前から、市民文化や芸能の発信、民衆に深く印象を残した出来事が起こった場所として日比谷公園と共に広く世の中に周知されているという歴史的価値
 - ・「市政会館」と「日比谷公会堂」の異なる機能と空間を、複合的な建物として一体的な立面により実現させた、きわめて完成度の高い建造物であるという意匠的・技術的価値
- などが評価され、市政会館及び日比谷公会堂は、2023年（令和5年）3月に東京都の指定有形文化財となりました。

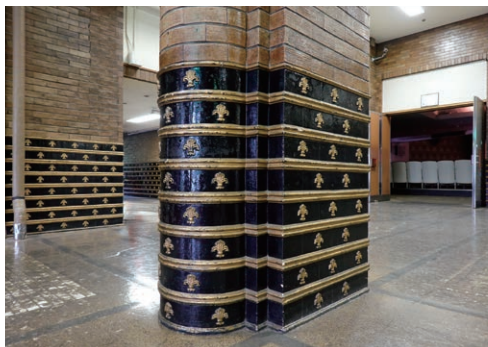


日比谷公会堂(正面)

<文化財として保存すべき意匠の例>



縦筋模様が入った茶褐色のタイル貼り
(外壁)



腰下を黒色テラコッタで飾られた壁



大理石をタイル状に貼る
テッセラー仕上げの床

7. 将来の日比谷公会堂

日比谷公会堂は、十分な耐震性を有していないことに加え、老朽化の進行、バックヤード等の不足、バリアフリー対応が十分ではないことにより、「バリアフリー日比谷公園プロジェクト」に基づき、耐震化工事・改修工事を予定しています。

※2016年(平成28年)から施設の使用を休止

●バリアフリー日比谷公園プロジェクトとは

歴史的文化的な価値を継承しつつ、日比谷公園を、年齢、性別、国籍、障がいの有無に関わらず、誰もが利用しやすく楽しめる公園に進化させるため、2023年度(令和5年度)に東京都が策定した事業計画です。



バリアフリー日比谷公園
プロジェクト

(令和5年7月時点)

整備内容

- ・耐震化工事と併せ、楽屋、リハーサル室の機能拡充やエレベーターの設置などバリアフリー化のための改修を実施します。
- ・公会堂の魅力や歴史を知ってもらうとともに、憩いの場となるよう、アーカイブカフェを設置します。
- ・誰もが気軽に公演を楽しめるよう、音声ガイドや字幕機等を活用できる施設にします。
- ・QRコード等で竣工時の公会堂や施設紹介等を多言語や画像で解説します。
- ・樹木は現在の位置に残し、移植が必要となる場合には樹木診断を行った上、公園内で移植します。